

学部・研究科等の現況調査表

教 育

平成22年6月

鳴門教育大学

目 次

2	学校教育研究科 高度学校教育実践専攻	1 - 1
---	--------------------	-------

2. 学校教育研究科 高度学校教育実践専攻

学校教育研究科高度学校教育実践専攻の

教育目的と特徴 1－2

分析項目ごとの水準の判断 1－3

分析項目Ⅰ 教育の実施体制 1－3

分析項目Ⅱ 教育内容 1－8

分析項目Ⅲ 教育方法 1－14

分析項目Ⅳ 学業の成果 1－21

分析項目Ⅴ 進路・就職の状況 1－26

質の向上度の判断 1－27

学校教育研究科高度学校教育実践専攻の教育目的と特徴

1 目的

本研究科は、「広い視野に立って精深な学識を授け、学校教育に関する理論と応用及び教育実践の場における教育研究能力を教授研究し、その深奥をきわめ、又は高度の専門的な能力及び優れた資質を有する教員の養成のための深い学識及び卓越した能力を培い、教育にたずさわる者の使命と熱意に応え、その研究研鑽を推進する」ことを目的としている。

また、本専攻の目的は、「幅広い視点からの問題分析力、対応力・解決力を培い、学校や地域で指導力を発揮できる教員を養成する」ことである。

2 特徴

幅広い視点と確かな理論、豊かな実践力をもつ教員を「確実」に育成するため、次のような教育内容、指導体制を整えている。

①現職教員学生、学部卒学生、それぞれのキャリアに応じたきめ細かい教育

主として現職教員を対象とする3コース「学校・学級経営コース」、「学校臨床実践コース」、「授業実践・カリキュラム開発コース」と、優れた新人教員を養成するための「教員養成特別コース」の計4コースを設置している。授業では、現職教員学生と学部卒学生とが、教職の基盤的な領域について、理論と実践を共通に学習し、相互に学び合い理解を深化させる「共通科目」と、コースごとにさらに理論と実践の専門性を深める「コース別選択科目」、「実習科目」を配置している。このカリキュラムによって、現職教員学生と学部卒学生の学び合いを実現し、各々のキャリアに応じて、必要とされる教育内容を整えている。

②学校側と連携しながら、学校の教育活動と学校経営の改善を連動させた教育

カリキュラムの特色は、実習科目にあり、これは学部の教育実習とは異なり、学校側と本学が協働しつつ、学校の教育活動や学校経営等の改善に連動する教育の実現をねらいとしている。

③実践と理論の指導体制

学校教育における豊富な指導経験を有し、実践的研究に優れた「実務家教員」と、「研究者教員」をバランスよく配置している。「研究者教員」は、学校・学級経営、授業研究、カリキュラム開発、教育相談、生徒指導等の領域で、学校現場の教員との共同研究や、学校をフィールドとする実践研究を行うなど、実践に深く関わる研究を行っている。

これらの教員がチームワークを発揮して指導を行い、ティーム・ティーチング方式を多くの授業で活用することにより、実践と理論のそれぞれの立場からの考え方や知識を提供する指導体制を整えている。

3 入学者の状況

本専攻の入学定員は50人であり、定員充足率は平成20年度72.0%、平成21年度82.0%である。

4 想定する関係者とその期待

本学では、初等中等教育における教育専門職をめざす学部生・院生、卒業生・修了生、教育委員会等教育行政関係者及び国内外の学校現場の教員を関係者として想定している。

これらの関係者が本専攻に期待することは、人間性豊かで、幅広い実践的な知識や技能を習得し、問題解決力に優れた教員と学校や地域で指導的役割を担う中核的な教員の養成である。

分析項目ごとの水準の判断

分析項目Ⅰ 教育の実施体制

(1) 観点ごとの分析

観点 基本的組織の編成

(観点に係る状況)

本専攻には、それぞれのキャリアに応じ、学校経営において中核的な役割を担う教員養成を目的とする「学校・学級経営コース」、生徒指導・教育相談に関する専門的知識を持つリーダー教員の養成を目的とする「学校臨床実践コース」、授業実践・カリキュラム開発に関する専門的知識を持つリーダー教員の養成を目的とする「授業実践・カリキュラム開発コース」の主として現職教員を対象とする3コースと、実践的対応力・展開力に優れた新人教員を養成するための「教員養成特別コース」の計4コースを設置している(貼付資料1-1-1)。

教員組織の構成は、「鳴門教育大学教育研究組織規則」に基づき、実践的指導力のある優れた教員を養成するという本学の教育目標を実現するため、学問領域で構成する「教育部」を設け、社会のニーズに即した弾力的かつ効率的な教育を行う、学部・大学院にとられない教員組織を構成している(貼付資料1-1-2)。

専任教員数は、研究者教員12人、実務家教員10人(うち1人はみなし実務家)と、専門職大学院設置基準の教員数11人を大きく上回るとともに、バランスよく配置することで、理論と実践のそれぞれの立場からの考え方や知識を提供できる体制を構築している。また、授業を担当する専任教員のうち、実務家教員が占める割合は約45%であり、専門職大学院設置基準に定める数値の「概ね4割以上」を満たしており、理論と実践の融合を図る観点からも十分な教育組織となっている(貼付資料1-1-3)。

貼付資料1-1-1 「大学院学校教育研究科(専門職学位課程)の専攻・コースの目的」

3 大学院学校教育研究科(専門職学位課程)の専攻・コースの目的

大学院学校教育研究科(専門職学位課程)には、高度学校教育実践専攻及び次のコースが設置されています。

高度学校教育実践専攻では、幅広い視点からの問題分析力・対応力・解決力を有し、学校や地域で指導力を発揮できる教員及び実践的対応力に優れた新人教員を養成することを目的としています。各コースの目的・特色及び入学定員等は、表のとおりです。()は入学定員

専攻	コ ー ス	目 的 ・ 特 色
高度 学校 教育 実践 専攻 (50)	学校・学級経営コース (10)	- 学校経営、教育行政、学校危機管理等に関する専門的・実践的な知識と技能を有し、学校組織の運営と改善、学校と家庭・地域との連携等を推進できる教員を養成します。 ○ 学校教育をめぐる様々な問題を、ミクロ(子ども集団)からマクロ(教育行政・政策)までの広い視点で把握できる力量形成を図ります。 ○ 学校経営・学級経営に関する院生の経験を説明できる理論的知識を習得するとともに、問題点を分析し、解決するための方法論の習得をめざします。 ○ 講義だけの授業ではなく、具体的事例の分析を通じて、習得した理論の適用可能性等について検討するなど、実践志向の授業を行います。 ○ ティーム・ティーチング、小集団討論、グループワークなどの多様な授業方法により、学生が主体的に関与できるような授業展開を行います。 ○ 勤務校(院生の課題)について、実務家教員と研究者教員がペアとなり、院生を含めた三者で課題の分析、解決プログラムの検討と設計、プログラムの効果の検証などを行い、その経験を他の実践にも活かすことができる汎用性のある実習を行います。
	学校臨床実践コース (15)	- 児童生徒理解、対人関係、コミュニケーション等に関する専門的・実践的な知識と技能を有し、生徒指導・教育相談の分野において学校の指導体制の改善を含めて、学校及び地域の学校群のリーダーとして活躍できる教員を養成します。 ○ 生徒指導のリーダー教員としての力量形成を図るため、解決や支援の方向を見通すことができる見立て力や人的・物的環境調整ができるマネジメント力等、実践的応用力を養成するカリキュラムを構成します。 ○ 生徒指導に関わる実践的応用力を養成するため、事例研究を往々にグループワークやロールプレイ、フィールドワークといった効果的、効率的に学習できる授業方法を取り入れています。 ○ 一つの授業科目を実務家教員と研究者教員によるティーム・ティーチングや全教員参加によって授業時数といった教員と学生の協働授業形態をとっています。 ○ 学校現場でのニーズに対応した実習を念頭におき、実習先での事例検討会を往々に実習を展開させることにより、生徒指導の実践的応用力を養成します。
	授業実践・カリキュラム開発コース (15)	- カリキュラム、授業構成・実践、学習評価等について専門的・実践的な知識と技能を有し、授業実践・カリキュラム開発のリーダーとして、授業研究、校内研修、教育委員会における研修等で指導的な役割を担える教員を養成します。 ○ 授業実践における学習者への深い理解とそれに基づく高度な指導技術の習得をめざした、授業の基礎理論からその実践的展開までを包括する科目群が用意されています。 ○ カリキュラムや教材の開発・評価に関する理論と技術を、学校の教育目標、児童生徒や地域の特性等に応じて活用できる実践力を養成します。 ○ 授業実践やカリキュラムに関する個人の力量形成だけでなく、それらに関する学校全体での取り組みや研究の推進に向けて必要な、教員間の協働体制の構築、研修の企画・運営等に関する資質能力を育成します。 ○ 実習では、各実習校が抱える授業やカリキュラムに関する課題を反映したテーマを設定し、その課題解決に向けて、大学院生、各学校教員、大学教員が協働して取り組みます。 ○ ワークショップやシミュレーション、事例分析等を積極的に取り入れ、実践との結びつきを重視した授業を行います。
	教員養成特別コース (10)	- 多様な児童の実態を理解し、適切に対応しうる資質能力、授業を構想・展開・省察しうる資質能力、学級集団を適切に形成・運営する資質能力を備え、意欲的に教職に取り組むことができる新人教員を養成します。 ○ 実践的対応力を持つ教員として不可欠な児童理解力、授業構想・展開・評価力、学級経営力、協働力について、学校現場(連携協力校)の教員、大学教員が連携して指導します。 ○ 連携協力校に最長1年6ヵ月間関わることで、児童、学級経営に関して、連続的にとらえることができます。 ○ 実習科目と連動する微習科目が設定されており、実践での疑問について、丁寧な指導が受けられるとともに、実践の理論化をもとに考えることができます。

(出典 平成20年度入学者用「履修の手引(専門職学位課程)」)

貼付資料1-1-2 「鳴門教育大学教育研究組織規則(抜粋)」

第2章 教員組織
第1節 教育部
(教育部)
第2条 本学は、教員組織として次の学問領域で構成する教育部を置く。

教育部	学 問 領 域
基礎・臨床系教育部	教育学、心理学、医学等
人文・社会系教育部	国語科教育、英語科教育、社会科教育、人間科学等
自然・生活系教育部	数学科教育、理科教育、技術科教育、家庭科教育等
芸術・健康系教育部	音楽科教育、美術科教育、保健体育科教育等

2 本学の教員(附属学校教員を除く。)は、前項に規定する何れかの教育部に所属する。

(出典 国立大学法人鳴門教育大学規則集)

貼付資料1-1-3 「教職大学院教員配置表」

教職大学院教員配置表

研究科	専攻・課程	コース	収容定員	教授	准教授	講師	助教	合計	
学校教育研究科	高度学校教育実践専攻	学校・学級経営コース	10	研究者教員	2		1	3	
				実務家教員	1	2		3	
				小計	3	2	1	6	
		学校臨床実践コース	15	研究者教員	1	1		2	
				実務家教員		1	1	2	
				小計	1	2	1	4	
		授業実践・カリキュラム開発コース	15	研究者教員	3	1		4	
				実務家教員	1	1		2	
				小計	4	2		6	
		教員養成特別コース	10	研究者教員		3		3	
				実務家教員		2	1	3	
				小計		5	1	6	
		計	50	研究者教員	6	5		1	12
				実務家教員	2	6	2		10
				合計	8	11	2	1	22
設置基準で必要な専任教員数 ()書きについては実務家教員の必要数を示す								11(5)	

(出典 教務課資料)

観点 教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制

(観点に係る状況)

教育内容については、授業の改善をねらいとした「教職大学院ファカルティ・ディベロップメント委員会」(以下、「教職大学院FD委員会」)を中心として、質の向上を図るべく継続的に取り組んでいる(貼付資料1-2-1)。また、全ての科目で受講生による授業評価(貼付資料1-2-2)を実施するとともに、教職大学院FD委員会は受講生の評価結果を分析し、3段階で評価して、その結果にコメントを付し(貼付資料1-2-3)、個々の教員にフィードバックしている。教員はその結果を基にして、次年度の授業改善のために、全ての授業科目について、教育の質の向上と改善のための具体的な手だてを含む「授業評価実績報告書」(別添資料1-2-4)の作成が義務づけられており、授業の改善と質の向上を実現する体制が整備されている。

また、「授業公開・授業検討会」(貼付資料1-2-5)において、教育委員会関係者等からの意見を聴取しており、「学習指導」、「学校分析」、「組織運営(マネジメント)」に関わる力量の育成に努めてほしい旨の意向を、平成22年度以降実施のカリキュラム改編に反映させた。なお、平成21年度の公開授業は、兵庫教育大学及び上越教育大学と共同で受託した「専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム」の成果発表と併せて実施した(貼付資料1-2-6)。

貼付資料1-2-1「鳴門教育大学大学院学校教育研究科高度学校教育実践専攻運営組織規程規定(抜粋)」

(FD委員会)	
第6条 FD委員会は、実践専攻としての組織的な教育の質の維持・向上の取り組みを行う。	
2 FD委員会は、次の各号に掲げる者をもって組織する。	
(1)	実践専攻専攻長
(2)	実践専攻副専攻長
(3)	実践専攻各コースの教育を担当する教員各1人
(4)	学長が必要と認めた者

(出典 国立大学法人鳴門教育大学規則集)

教職大学院ファカルティ・ディベロップメント委員会

規則の根拠	職 員		任 期	備 考
	職 名	氏 名		
6-2-(1)	専 攻 長	佐 古 秀 一	21.4.1～22.3.31	委員長
6-2-(2)	副 専 攻 長	小 野 瀬 雅 人	21.4.1～22.3.31	
6-2-(3)	准 教 授	大 西 宏	20.4.1～22.3.31	学校・学級経営コース
6-2-(3)	講 師	末 内 佳 代	20.4.1～22.3.31	学校臨床実践コース
6-2-(3)	教 授	西 村 公 孝	20.4.1～22.3.31	授業実践・カリキュラム開発コース
6-2-(3)	准 教 授	山 田 芳 明	20.4.1～22.3.31	教員養成特別コース

(出典 国立大学法人鳴門教育大学委員会名簿)

貼付資料1-2-2「教職大学院授業評価アンケート用紙(表面)」

教職大学院授業評価アンケート

回答欄の○を鉛筆やボールペンなどで塗りつぶしてください。[可:●/ 不可:○/ ⑤:○/ ④:○/ ③:○/ ②:○/ ①:○]

I 授業科目名
担当教員名

1 学年及び学期[1 1年前期 2 1年後期 3 2年前期 4 2年後期] ① ② ③ ④

2 授業区分[1 共通科目 2 コース別選択科目] ① ② ③ ④

II この授業について、各項目ごとに、次の5つの評価から該当する番号を1つ選んで右端のマーク欄をマークしてください。

⑤:全くそう思う ④:かなりそう思う ③:どちらともいえない ②:あまりそう思わない ①:全くそう思わない

1 授業概要で紹介された授業計画は理解しやすく、適切であった。 ⑤ ④ ③ ② ①

2 授業概要や授業中に紹介されたテキスト・参考書は役に立った。 ⑤ ④ ③ ② ①

3 授業の内容には一貫性があった。 ⑤ ④ ③ ② ①

4 教師の実践力の修得に役立つ内容であった。 ⑤ ④ ③ ② ①

5 学校現場のコースと適合し、学校や地域のリーダーとして指導力を発揮するのに役立つ内容であった。 ⑤ ④ ③ ② ①

6 授業開始時や途中の成績評価の方法の説明は、具体的であった。 ⑤ ④ ③ ② ①

7 授業をよく準備し、熱心に教えた。 ⑤ ④ ③ ② ①

8 授業の進む速さは適切であった。 ⑤ ④ ③ ② ①

9 受講生の理解度を確認しながら授業を進めた。 ⑤ ④ ③ ② ①

10 受講生に授業への参加(質問、発言、討議など)をよく促した。 ⑤ ④ ③ ② ①

11 テキストや参考書の使い方は適切であった。 ⑤ ④ ③ ② ①

12 教育機器の使用は適切であった。 ⑤ ④ ③ ② ①

13 配布された資料・文献等は、授業内容を理解する上で役に立った。 ⑤ ④ ③ ② ①

14 受講生に分かりやすく説明した。 ⑤ ④ ③ ② ①

15 教員の声は聞き取りやすかった。 ⑤ ④ ③ ② ①

16 板書の文字は見やすかった。 ⑤ ④ ③ ② ①

17 授業に主体的・積極的に取り組んだ。 ⑤ ④ ③ ② ①

18 この授業は、自分自身にとって満足できるものであった。 ⑤ ④ ③ ② ①

19 ⑤ ④ ③ ② ①

20 ⑤ ④ ③ ② ①

● ● ● ● ●

(出典 教務課資料)

貼付資料1-2-3 「教職大学院 FD 委員会からのコメント」

専攻会議資料	2008 年 12 月 24 日
「教職大学院授業評価アンケート調査の集計・分析」に対する 「FD委員会からのコメント」について 教職大学院FD委員会	
1. 「FD委員会からのコメント」の基本的な考え方 ○今後も「FD 委員会からのコメント」は継続するので、主観性を排除し、できる限り客観性があり、かつ改善の方向性がみえるコメントとする。 ①コメントの内容は、A,B,C の「3段階評価」とし、3段階それぞれの内容を文章で示す。 ② B,C 評価の場合は、必要に応じて、改善の具体的内容を記した追加コメントを付すことができる。	
2. 「3段階評価」の内容と判定基準 (1) 内 容 A 受講生の授業評価、授業者の自己評価をみると、授業の目的を十分達成していると判断できます。今後も、シラバスにしたがって授業を進めてください。 B 受講生の授業評価、授業者の自己評価をみると、授業の目的を概ね達成していると判断できます。受講生と授業者の評価結果を踏まえ、授業の目的を十分達成できるよう、課題として指摘のあった授業内容・授業方法を検討し、必要な改善を図った上で今後の授業を行ってください。 C 受講生の授業評価、授業者の自己評価をみると、授業の目的を達成できていないと判断できます。受講生と授業者の評価結果を踏まえ、授業の目的を十分達成できるよう、課題として指摘のあった授業内容、授業方法を十分に検討し、改善を図った上で今後の授業を行ってください。 (2) 判定基準 A アンケート18項目の全てにおいて、2と1の回答者数が、全回答者数の20%未満である。 B アンケート18項目中の1～数項目(5項目程度)で、2と1の回答者数が全回答者数の20%以上である。 C アンケート18項目中の数項目(5項目程度)以上で、2と1の回答者数が全回答者数の20%以上である。	

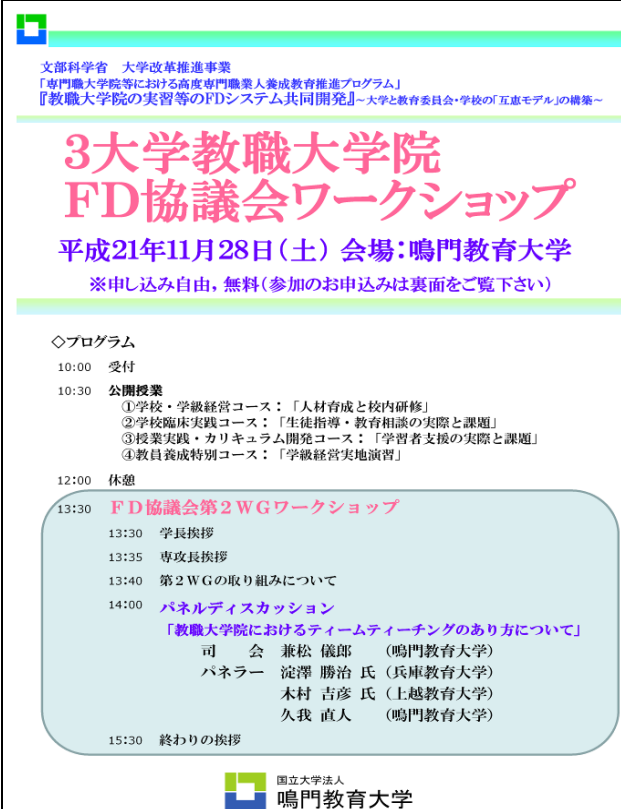
(出典 専攻会議資料)

貼付資料1-2-5 「平成20年度鳴門教育大学教職大学院『授業公開・授業検討会』」

平成20年度 鳴門教育大学 教職大学院「授業公開・授業検討会」 平成20年4月に設置しました本学大学院学校教育研究科高度学校教育実践専攻(教職大学院)では、幅広い視点と確かな理論、豊かな実践力を有する教員を育成するため、理論的学習と実践的・臨床的学習を段階的に進展させる教育課程を構築するとともに、学校教育活动や学校経営の改善等に連動した教育、実務家教員と研究者教員の協働による教育指導を展開しています。 「授業公開・授業検討会」では、本学教職大学院における授業内容等を公開するとともに、「理論と実践の融合」を意識した教育内容及び教育方法等の在り方について検討を行います。																																		
平成20年 11月29日(土) 鳴門教育大学 講義棟	◇プログラム <table border="1"> <tr> <td>10:00</td> <td>受付</td> <td></td> </tr> <tr> <td>10:20</td> <td>公開授業Ⅰ 共通科目 「学校カリキュラムの開発」</td> <td>3階 B308 担当: 村川雅弘 教授</td> </tr> <tr> <td>11:50</td> <td>休憩</td> <td></td> </tr> <tr> <td>13:10</td> <td>公開授業Ⅱ コース別選択科目</td> <td></td> </tr> <tr> <td></td> <td>①学校・学級経営コース 「家庭・地域との連携構築に関する事例研究」</td> <td>2階 B202 担当: 岩永 定 教授, 大西 宏 准教授</td> </tr> <tr> <td></td> <td>②学校臨床実践コース 「生徒指導・教育相談の実践と課題」</td> <td>B203 担当: 山下一夫 教授, 小坂浩嗣 准教授 佐藤 亨 准教授, 末内佳代 講師</td> </tr> <tr> <td></td> <td>③授業実践・カリキュラム開発コース 「教材教具の開発演習」</td> <td>B205 担当: 小野瀬雅人 教授, 西村公孝 教授 廣瀬隆司 准教授</td> </tr> <tr> <td></td> <td>④教員養成特別コース 「学級経営実地演習」</td> <td>B206 担当: 藤原伸彦 准教授, 豊成 哲 准教授</td> </tr> <tr> <td>14:40</td> <td>休憩</td> <td></td> </tr> <tr> <td>15:00</td> <td>授業検討会 「教職大学院のカリキュラムの改善に向けて」</td> <td>1階 B101 司会: 山下一夫 学長補佐 パネラー: 小野瀬雅人 教授, 久我直人 准教授 他, 院生, 教育委員会関係者</td> </tr> <tr> <td>17:00</td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	10:00	受付		10:20	公開授業Ⅰ 共通科目 「学校カリキュラムの開発」	3階 B308 担当: 村川雅弘 教授	11:50	休憩		13:10	公開授業Ⅱ コース別選択科目			①学校・学級経営コース 「家庭・地域との連携構築に関する事例研究」	2階 B202 担当: 岩永 定 教授, 大西 宏 准教授		②学校臨床実践コース 「生徒指導・教育相談の実践と課題」	B203 担当: 山下一夫 教授, 小坂浩嗣 准教授 佐藤 亨 准教授, 末内佳代 講師		③授業実践・カリキュラム開発コース 「教材教具の開発演習」	B205 担当: 小野瀬雅人 教授, 西村公孝 教授 廣瀬隆司 准教授		④教員養成特別コース 「学級経営実地演習」	B206 担当: 藤原伸彦 准教授, 豊成 哲 准教授	14:40	休憩		15:00	授業検討会 「教職大学院のカリキュラムの改善に向けて」	1階 B101 司会: 山下一夫 学長補佐 パネラー: 小野瀬雅人 教授, 久我直人 准教授 他, 院生, 教育委員会関係者	17:00		
10:00	受付																																	
10:20	公開授業Ⅰ 共通科目 「学校カリキュラムの開発」	3階 B308 担当: 村川雅弘 教授																																
11:50	休憩																																	
13:10	公開授業Ⅱ コース別選択科目																																	
	①学校・学級経営コース 「家庭・地域との連携構築に関する事例研究」	2階 B202 担当: 岩永 定 教授, 大西 宏 准教授																																
	②学校臨床実践コース 「生徒指導・教育相談の実践と課題」	B203 担当: 山下一夫 教授, 小坂浩嗣 准教授 佐藤 亨 准教授, 末内佳代 講師																																
	③授業実践・カリキュラム開発コース 「教材教具の開発演習」	B205 担当: 小野瀬雅人 教授, 西村公孝 教授 廣瀬隆司 准教授																																
	④教員養成特別コース 「学級経営実地演習」	B206 担当: 藤原伸彦 准教授, 豊成 哲 准教授																																
14:40	休憩																																	
15:00	授業検討会 「教職大学院のカリキュラムの改善に向けて」	1階 B101 司会: 山下一夫 学長補佐 パネラー: 小野瀬雅人 教授, 久我直人 准教授 他, 院生, 教育委員会関係者																																
17:00																																		

(出典 平成20年度鳴門教育大学教職大学院「授業公開・授業検討会」パンフレット)

貼付資料1-2-6 「平成21年度3大学教職大学院 FD 協議会ワークショップ」



文部科学省 大学改革推進事業
「専門職大学院等における高度専門職業人養成教育推進プログラム」
『教職大学院の実習等のFDシステム共同開発』～大学と教育委員会・学校の「互恵モデル」の構築～

3大学教職大学院 FD協議会ワークショップ

平成21年11月28日(土) 会場:鳴門教育大学
※申し込み自由, 無料(参加のお申込みは裏面をご覧ください)

◇プログラム

10:00 受付

10:30 公開授業
①学校・学級経営コース:「人材育成と校内研修」
②学校臨床実践コース:「生徒指導・教育相談の実際と課題」
③授業実践・カリキュラム開発コース:「学習者支援の実際と課題」
④教員養成特別コース:「学級経営実地演習」

12:00 休憩

13:30 **FD協議会第2WGワークショップ**
13:30 学長挨拶
13:35 専攻長挨拶
13:40 第2WGの取り組みについて
14:00 **パネルディスカッション**
「教職大学院におけるチームティーチングのあり方について」
司 会 兼松 儀郎 (鳴門教育大学)
パネラー 淀澤 勝治 氏 (兵庫教育大学)
木村 吉彦 氏 (上越教育大学)
久我 直人 (鳴門教育大学)

15:30 終わりの挨拶

国立大学法人
鳴門教育大学

(出典 平成21年度「3大学教職大学院 FD 協議会ワークショップ」パンフレット)

(2)分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

基本的組織の編成については、専任教員数は、研究者教員12人、実務家教員10人（うち1人はみなし実務家）と、専門職大学院設置基準の教員数11人を大きく上回るとともに、バランスよく配置している。

教育内容、教育方法の改善に向けて取り組む体制については、専攻独自に設置した「教職大学院FD委員会」において、教職大学院で求められる資質・能力を育成する上で不可欠の指導項目に加え、自由記述における評価の分析も含めた授業評価を実施している。また、同委員会では、その結果を分析し、一定の基準に基づき3段階で評価して授業者にフィードバックするとともに、授業者による成果・課題の確認と今後の改善・向上の具体的取組を「授業評価実績報告書」として冊子及びウェブページに公表するなど、授業の改善に資する体制を確立し、評価から改善への手続きを形式化していることから実効あるものとなっている。

以上のことから、「期待される水準を上回る」と判断できる。

分析項目Ⅱ 教育内容

(1) 観点ごとの分析

観点 教育課程の編成

(観点に係る状況)

本専攻では、学校教育が直面する諸課題の構造的・総合的な理解にたつて幅広く指導性を発揮できる教員の養成を目指して、「共通科目」、「コース別選択科目」、「実習科目」の3科目群を設定し、それらが相互に関連づいた教育課程を編成している(貼付資料2-1-1~3)。教育課程の構造は、1年次において、教員に共通して必要とされる専門性の領域に関する科目群を共通科目として配置し、その後に各コースの専門的な知識と技能等を修得するコース別選択科目を配置する。そして、主として2年次において、これらの学習内容を実習科目の履修を通して検証するとともに、実践力の育成を図る。つまり、専門的知識・実践的技能等の修得(理論的学習)と実習における実践(実践的・臨床的学習)を段階的に進展させる教育課程とする。これによって、専門的知識と高度な実践力を確実に修得させる。

また、平成21年度から、教職大学院における「到達目標(3領域11観点)」(貼付資料2-1-4)を設定し、2年間の学修目標を明示するとともに教育課程に反映させている。

なお、教育委員会関係者等の意見を教育課程の編成に反映させ、不断に改善することを目的として、「教職大学院カリキュラム開発チーム」(以下、「カリキュラム開発チーム」)を設置しており(貼付資料2-1-5)、授業評価等の結果を基に、教育課程の改善状況の評価、次年度に向けて各学生の実習課題と実習校の学校課題との調整のための教育課程の検討及び教員に求められる資質・能力と、教職大学院の教育内容との対応関係の点検など、更なる改善点等についての意見を聴取している。

貼付資料2-1-1 「授業科目の概要『共通科目』」

授業科目の概要

授業科目の名称		配当 年次	単位数又は時間数		授業形態				専任教員配置						備 考
			必修	選択	自由	講義	義演	習実 実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
共通科目	① 教育課程の編成及び実施に関する領域 カリキュラム編成の実践と課題 学校カリキュラムの開発	1 1・2	2 2				○ ○			1 1					
	② 教科等の実践的な指導方法に関する領域 授業実践の分析と改善 学習指導の構成と展開 学習評価の実践と課題	1 1 1	2 2 2				○ ○ ○		2 1 2		1 1				
	③ 生徒指導及び教育相談に関する領域 生徒指導・教育相談に関するケースカンファレンス 子どもの内面理解に関する実践と課題	1・2 1	2 2				○ ○	○		1 1		1 1			
	④ 学級経営及び学校経営に関する領域 学級経営の実践と課題 学校経営の実践と課題	1 1・2	2 2				○ ○		1 2	1 1					
	⑤ 学校教育と教員の在り方に関する領域 教員の在り方に関する実践と課題	1	2				○				1				
	⑥ その他の領域 乳幼児から児童期の発達支援と課題 軽度発達障害児への支援と課題 道徳教育の実践と課題	1・2 1・2 1・2		2 2 2			○ ○ ○							その他の領域については、 2科目4単位以上を修得すること。	

(出典 鳴門教育大学大学院学校教育研究科高度学校教育実践専攻(教職大学院)設置計画に係る補正計画書)

貼付資料2-1-2 「授業科目の概要『コース別選択科目』」

授業科目の概要

授業科目の名称		配当 年次	単位数又は時間数		授業形態			専任教員配置						備 考
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実験 実習	教 授	准教授	講 師	助 教	助 手	
学校・学級経営コース <														

（出典 鳴門教育大学大学院学校教育研究科高度学校教育実践専攻（教職大学院）
設置計画に係る補正計画書）

貼付資料2-1-3 「授業科目の概要『実習科目』」

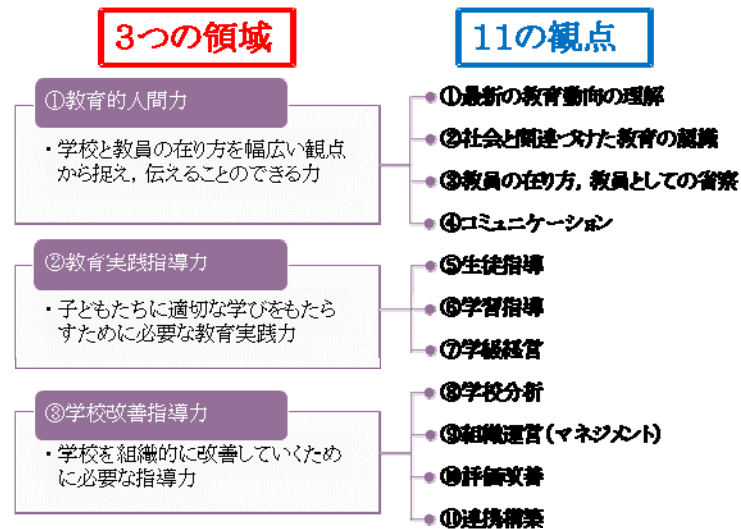
授業科目の概要

授業科目の名称		配当 年次	単位数又は時間数			授業形態			専任教員配置						備 考		
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実験 実習	教 授	准教授	講 師	助 教	助 手				
実 習 科 目	学校・学級経営コース																
	学校臨床実践コース																
	授業実践・カリキュラム開発コース																
	課題分析実習	2	4					○	8	6	1	1					
	異校種実習	2	2					○	8	6	1	1					
	課題解決実習	2	4					○	8	6	1	1					
	教員養成特別コース																
	授業熟達実習	1	2					○		5	1						
	学級経営基礎実習	1	2					○		5	1						
	児童理解実習	1	2					○		5	1						
	学級経営基礎実習	2	4					○		5	1						
	総合インターンシップⅠ	2	2					○		5	1						
	総合インターンシップⅡ	2		5				○		5							

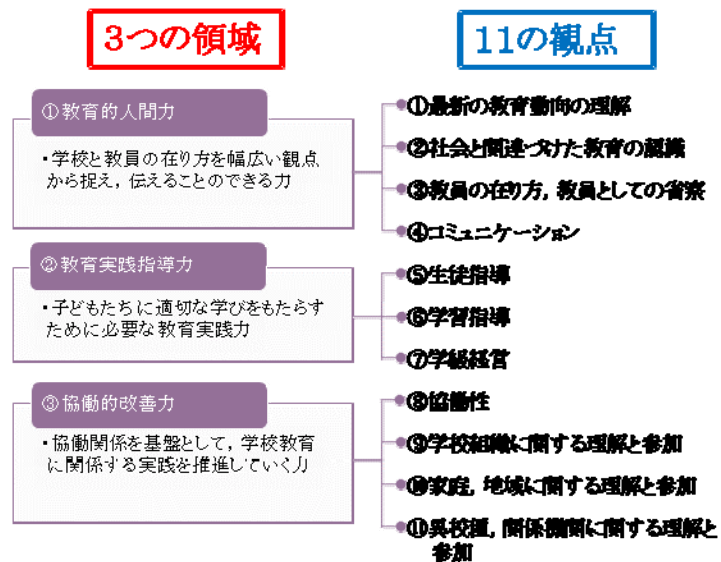
（出典 鳴門教育大学大学院学校教育研究科高度学校教育実践専攻（教職大学院）
設置計画に係る補正計画書）

貼付資料2-1-4「教職大学院における到達目標」

現職教員を対象とするコース（スクールリーダーの養成）



教員養成特別コース（新任教員の養成）



（出典 「学びのポートフォリオ」）

貼付資料2-1-5「教職大学院カリキュラム開発チーム」

(開発チーム)	
第3条	開発チームは、実践専攻に係る教育課程の評価及び開発並びに教育方法等の評価及び改善等を行う。
2	開発チームは、次の各号に掲げる者をもって組織する。
(1)	教育研究担当理事
(2)	実践専攻専攻長
(3)	実践専攻副専攻長
(4)	実践専攻各コース長
(5)	徳島県教育委員会及び都道府県教育委員会の関係者
(6)	学長が必要と認めた者

(出典 国立大学法人鳴門教育大学規則集)

教職大学院カリキュラム開発チーム

規則の根拠	職 員		任 期	備 考
	職 名	氏 名		
3-2-(1)	理 事	田 中 雄 三		教育研究担当理事
3-2-(2)	専 攻 長	佐 古 秀 一	21.4.1～22.3.31	
3-2-(3)	副 専 攻 長	小 野 瀬 雅 人	21.4.1～22.3.31	
3-2-(4)	コ ー ス 長	兼 松 儀 郎	21.4.1～22.3.31	学校・学級経営コース
3-2-(4)	コ ー ス 長	山 下 一 夫	21.4.1～22.3.31	学校臨床実践コース
3-2-(4)	コ ー ス 長	村 川 雅 弘	21.4.1～22.3.31	授業実践・カリキュラム開発コース
3-2-(4)	コ ー ス 長	葛 上 秀 文	21.4.1～22.3.31	教員養成特別コース
3-2-(5)	教職員研修課 長		21.4.1～22.3.31	徳島県立総合教育センター
3-2-(5)	義務教育課 長		21.4.1～22.3.31	香川県教育委員会
3-2-(5)	義務教育課 課長補佐		21.4.1～22.3.31	愛媛県教育委員会 (指導部)
3-2-(5)	小中学校課 長		21.4.1～22.3.31	高知県教育センター

(出典 国立大学法人鳴門教育大学委員会名簿)

観点 学生や社会からの要請への対応

(観点に係る状況)

「カリキュラム開発チーム」において、平成20年度及び平成21年度の授業評価等の結果を基に、教育委員会関係者等に教育課程の編成等についての意見を聴取した。指摘された「授業内容の一部重複等」については、到達目標の再検討を行い、これに準拠する授業科目の再編を実施した。特に「2年次の実習科目への準備体制」に対する要望を受けて、実習科目の準備のため、従来、1年次に指導上作成させていた「学校アセスメントレポート」(別添資料2-2-1)を発展させ、平成22年度以降実施のカリキュラムの改編等に伴い、「学校アセスメント演習」として科目を設定した。

さらに、授業内容や授業方法等に関する学生からの意見聴取の機会を設けている。学生からの実習への要望「実習課題の設定に関する実習校との調整」について、その対処方法を専攻長が回答し、対応した。授業に係る「レポート課題」への要望については、教職大学院FD委員会がレポートの回数、実施時期等を改善する措置をとった。さらに、その改善に向けての方策を専任教員に周知し、指導に役立てた。

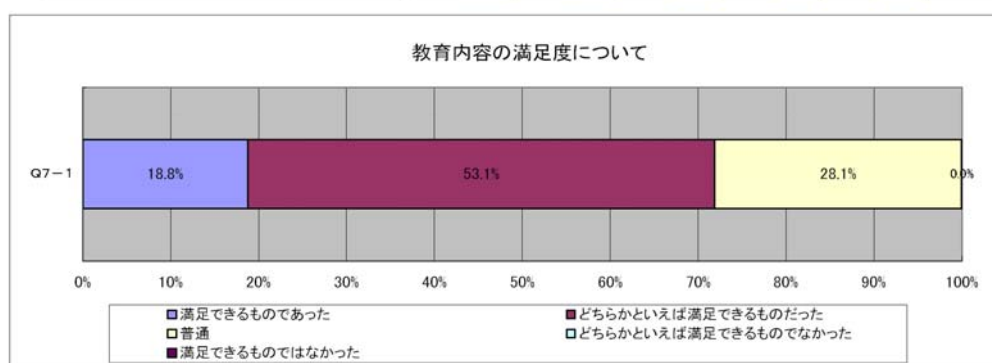
また、「受講生のキャリアの違いから来る、授業における理解度の格差に対する配慮」への要望は、平成22年度以降実施のカリキュラムの改編において、学生のキャリアに応じた授業構成に設定した。

なお、平成 22 年 3 月修了生に実施した「鳴門教育大学の教育等に関するアンケート」における「教育内容の満足度について」の設問では、「満足できるものであった」、「どちらかといえば満足できるものであった」の回答が約 70%で、不満足 of 回答は無かったことから、修了生全員が本学での学習内容に一定以上の満足度を示していると判断できる（貼付資料 2-2-2）。また、平成 21 年 9 月と平成 22 年 3 月に実施した、現職教員学生の勤務校校長 33 人を対象としたアンケート結果では、「教育的人間力」、「教育実践指導力」及び「学校改善指導力」の全ての項目で、平成 21 年 9 月実施時に比べ「効果がある」との回答が最大で 10%増加しており、特に、「教育実践指導力」においては、平成 22 年 3 月実施分では 33 校全ての校長が「効果がある」と回答するなど、勤務校校長が本学の教育内容に満足していると判断できる（貼付資料 2-2-3）。

貼付資料 2-2-2 「鳴門教育大学の教育等に関するアンケート(平成 22 年 3 月修了者)」

Q7 本学で学んだことの成果について

Q7-1 教育内容の満足度について	満足できるものであった		どちらかといえば満足できるものであった		普通		どちらかといえば満足できるものではなかった		満足できるものではなかった		有効回答件数
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	
Q7-1 教育内容の満足度について	6	18.8%	17	53.1%	9	28.1%	0	0.0%	0	0.0%	32



(出典 鳴門教育大学の教育等に関するアンケート集計(平成 22 年 3 月修了者))

貼付資料 2-2-3 「教職大学院の教育に関するアンケート結果」

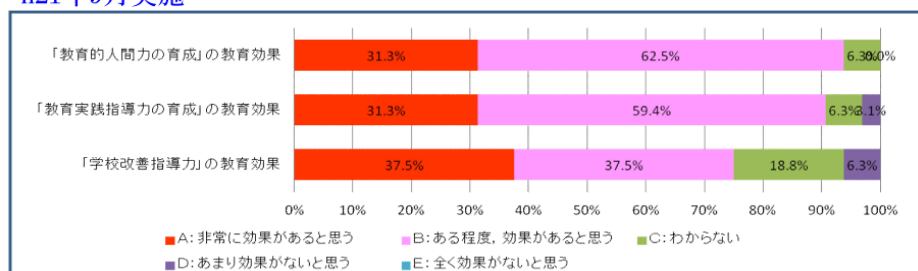


教職大学院の教育に関するアンケート結果①

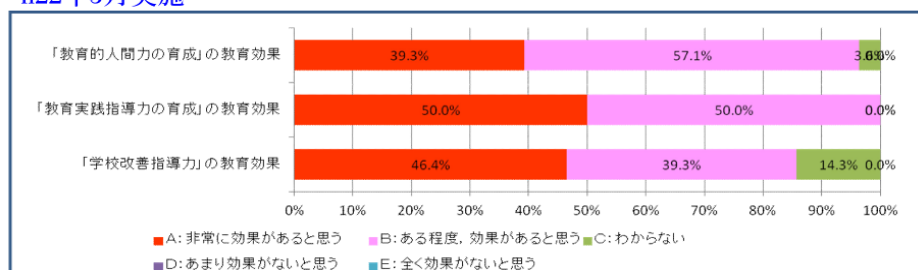
(H20入学現職教員院生の勤務校長による見解)

I 3 領域における教育効果

H21年9月実施



H22年3月実施



(出典 教務課資料)

(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

教育内容については、共通科目、コース別選択科目及び実習科目を体系的に編成しており、平成 21 年度からは教職大学院における「到達目標（3 領域 11 観点）」を設定し、2 年間の学修の到達目標を明示している。

また、教育委員会関係者等の意見を教育課程の編成に反映させ、不断に改善することを目的として、「カリキュラム開発チーム」を設置し、各委員から改善意見を聴取し、次年度のカリキュラム等の改善に活かしている。

一方、学生や社会からの要請への対応としては、「授業公開・授業検討会」(**分析項目 I : 1-4 頁参照**)において教育委員会関係者等からの意見を聴取し、次年度以降のカリキュラム改編等に活かすとともに、授業内容や授業方法等に関する学生からの意見聴取の機会を設けて、学生への綿密で継続的な対応を実現している。

さらに、平成 22 年 3 月修了生に実施した「鳴門教育大学の教育等に関するアンケート」における「教育内容の満足度について」の肯定的な回答が約 70%で、不満足な回答が無かったことや、平成 22 年 3 月に実施した、現職教員学生の勤務校校長 33 人を対象としたアンケート結果において高い評価を得、特に「教育実践指導力」については「効果がある」との回答を 33 人全ての校長から得られた。

以上のことから、「期待される水準を上回る」と判断できる。

分析項目Ⅲ 教育方法

(1) 観点ごとの分析

観点 授業形態の組合せと学習指導法の工夫

(観点に係る状況)

本専攻は、理論と実践の融合を図る観点から、ほぼ全ての科目で事例研究、ワークショップ、討論などの双方向型の授業を実施するなど、創意工夫を凝らした授業を展開している(貼付資料3-1-1)。例えば、共通科目「学校カリキュラムの開発」では、受講生が自己の専門教科や興味・関心を踏まえた上で、コースを超えて10グループに分かれ、ワークショップを通して新学習指導要領に対応した授業づくりや教材開発等を行った(貼付資料3-1-2)。

また、共通科目とコース別選択科目におけるほぼ全ての授業科目で、研究者教員と実務家教員がティーム・ティーチングを行う体制をとっており(貼付資料3-1-3~4)、理論を踏まえながら実践的な力量形成を意識した授業を実施している。

なお、コース別選択科目及び実習科目では、2~14人規模の少人数教育を実施するほか(貼付資料3-1-5)、ロールプレイング、プレゼンテーション、グループ・ワーク等について、教育効果が期待できる学習指導法の工夫を行った。

実習科目については、理論と実践の両面からの指導を充実させるため、院生ごとに実務家教員と研究者教員が協働して指導する体制を構築するとともに、実習における学習成果を確実にあげるため、実習校の校長、メンター教員等と緊密に連携をとりながら実習指導を計画的に行っている(別添資料3-1-6)。

貼付資料3-1-1 「平成21年度 授業概要(抜粋)」

【共通科目：学級経営の実践と課題】

【授業科目名】	学級経営の実践と課題
【英 文 名】	Practice and Tasks in Classroom Management
【担当教員・所属・研究室番号】	久我直人・学校・学級経営・A708 佐古秀一・学校・学級経営・A607
【標準履修年次】	1・2年次
【授業形態】	講義・演習
【開講時期】	前期・木曜・2限
【単位数】	2単位
【キーワード】	学級経営、学級集団、教師のリーダーシップ、学級経営実践
【連絡先・オフィスアワー】	sako@inaruto-u.ac.jp に連絡の上、日程を調整する

【授業の目的及び趣旨】

これからの教師にとって、学級指導に関する力量を高めておくことは必須の課題となっている。本授業では教師の学級指導力を理論と実践の両面から形成することをねらいとする。そのため、まず①学級経営の中核をなす集団経営に関する理論と技法を修得する。②学級経営を実践する上で留意しておくべき課題ならびに年間を通しての学級経営の計画と実施について、実践事例などをとにした学習を行う。

期待される学習効果：

- ① リーダーシップ、学級集団の診断、児童生徒理解に関する基礎理論と技法等、教師の学級指導力の基盤となる知識を修得する。
- ② 年間を通して学級経営の計画と実施、保護者との対応、学校経営と学級経営の関連など、学級経営の主要な課題について、実践事例や留意すべき点を学習する。

【授業計画】

回	授 業 の 内 容
1	学級経営の範囲と機能(講義：久我・佐古) 【教師の職務における学級経営の範囲、ならびに児童生徒の学習や生活に及ぼす学級経営の機能について、従来の研究知見などを提示し、討論を行う。】
2	教師のリーダーシップと学級集団①(講義・演習：久我・佐古) 【学級集団の構造や風土に及ぼす教師のリーダーシップの影響について、研究知見を学習し、学級経営の実践に対する意義や課題について討論を行う。】
3	教師のリーダーシップと学級集団②(演習：久我・佐古) 【集団におけるリーダーシップ機能を実践的に理解するために、受講生を小集団に分割して、問題解決を行い、その過程における成員それぞれのリーダーシップ行動のフィードバックを行う。】
4	学級集団の診断と理解①(講義・演習：久我・佐古) 【学級における対人関係を診断するための技法と活用方法について学習し、学級での使用する場合の留意点、有効な活用方法について、討論し考察を深める。】
5	学級集団の診断と理解②(演習：久我・佐古) 【第4回で学習した技法を用いて測定した実際のデータを用いて、学級集団の問題とその解決方法について、討論を行う。】
6	集団における児童生徒理解の問題①(講義・演習：久我・佐古) 【教師が学級集団における児童生徒を理解する際に生じる諸問題について、実際の事例を用いて学習し、児童生徒理解の歪みの傾向とその原因について、研究知見をもとに議論し理解を深める。】

7	集団における児童生徒理解の問題②(講義・演習：久我・佐古) 【学級崩壊等の事例に見られる、教師による児童生徒に対する「硬い」理解について、研究知見や事例をもとに学習する。さらに、それをどのように改善していくことができるかについて討論する。】
8	保護者との対応と関係づくり①(講義・演習：久我・佐古) 【対応の困難な保護者との対応について、事例をもとに学習する。あわせて、保護者の学校や教師に対する意識傾向について研究知見を検討し、教師としてそれをいかに受けとめるべきかについて討論する。】
9	保護者との対応と関係づくり②(ロールプレイング：久我・佐古) 【教師に対する問い合わせ、クレーム等に対する対応の仕方について、ロールプレイングによって学習する。】
10	学校経営と学級経営(講義：久我・佐古) 【学校経営、学年(教科)経営、学級経営の相互関連について、具体的な資料をもとにして学習し、学校の組織的な教育機能との観点から学級経営を位置づけ、理解する。】
11	年間を通しての学級経営①：1学期における学級経営の課題(講義・演習：久我・佐古) 【学年当初の学級経営の実態と課題について、実践事例を通して学習する。学年初め段階における集団形成ならびに教室経営の留意点、工夫などについて、議論し理解を深める。】
12	年間を通しての学級経営②：2・3学期における学級経営の課題(講義・演習：久我・佐古) 【2・3学期における学級経営の実態と課題について、実践事例を通して学習する。とくに行事を活用した学級経営や学級集団の発達過程等について、議論し理解を深める。】
13	学級経営案の作成①(演習：久我・佐古) 【学校経営をどのように構想・実施するかについて、具体的な学級経営案の事例をもとにして学習する。】
14	学級経営案の作成②(ワークショップ：久我・佐古) 【模範的な学級を想定して、年間の学級経営案を作成する。】
15	学級経営案の作成③(プレゼンテーション：久我・佐古) 【学級経営案のプレゼンテーションを行い、さらに修正すべき点、ならびに工夫すべき点等について検討を行う。】

【履修上の注意事項】

演習は、受講生を5~6名程度の小集団に分けて実施する。

【成績評価方法】

授業内容のまとめりとレポートを、5回程度課す。最終成績は、授業への参加度(30%)とこれらのレポートの成績(70%)によって決める。

【テキスト・参考文献】

随時、授業においてテキスト・資料を紹介する。

(出典 平成21年度授業概要)

貼付資料3-1-2 「学校カリキュラムの開発(抜粋)」

「学校カリキュラムの開発」

- 1 教科・学校種：数学・小中高
- 2 単元名「携帯電話の料金プランって複雑？」（通常は中学2年生での内容）
テーマ『活用型』学習の成果と課題
- 3 メンバー：窪美正一，中妻佳代，河野恵子，前神和明，○三橋和博

4 概要

(1) 授業実践記録を素に「活用型」授業について考えるワークショップ

(2) わらい

学習指導要領改善のポイントの1つである「活用型」学習であるが，学校現場でもその授業づくりへの模索が進んでいる。そこで，実際に行われた授業をワークショップで検討することによって，「活用型」学習の成果や課題，改善策を明確にしていく。

(3) ワークショップ過程

- ① ワークショップの進め方についての確認
授業実践記録の分析の視点，付箋紙の記入方法，模造紙上での作業方法について確認する。



- ② 授業実践記録の分析
授業実践記録を読み，新学習指導要領や中学校学習指導要領解説を参考にしながら次の要領で付箋紙に記入していく。
○新学習指導要領の改善のポイントを意識して工夫されている→青の付箋紙
○良い点→緑の付箋紙
○疑問点→黄の付箋紙
○課題→赤の付箋紙



- ③ 模造紙にまとめる
各自が書いた付箋紙を，右のワークシート上に貼っていく。
貼り終えたら，整理・構造化していく。

プラス面		マイナス面
	ここに授業記録を張る	



プラス面，マイナス面の枠をこえた関連付けを行うこともある。
このことにより，課題の解決方法が，簡単に見えてくる場合がある。

(出典 小中高・算数数学グループによる課題レポート)

貼付資料3-1-3 「授業科目の概要『共通科目』(抜粋)」

授 業 科 目 の 概 要			
(学校教育研究科高度学校教育実践専攻)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
共 通 科 目	カリキュラム編成の実 際と課題	各教科等に共通の「カリキュラムのとらえ方とその構成」、 「指導と評価の一体化」、「個に応じた指導」、さらに総合 的な学習等を含めて、学習指導要領にもとづく具体的な教育 課程編成の原理と方法について修得する。そのために、授業 では、学校づくりの事例検討、各教科や道徳・特別活動・総 合的な学習の時間のカリキュラムや教材の開発演習とそれら の評価のための模擬授業等を実施する。 (ティーム・ティーチング方式／全15回) (15 廣瀬 隆司／10回) 学校現場での単元開発等に関する豊富な実務経験に基づ き、学校におけるカリキュラム編成の実際と課題について、 実務家の観点から考察を行う。 (3 村川 雅弘／15回) 教育課程論に関する研究成果に基づき、学校現場で求めら れるカリキュラム編成とその原理について、理論と実践の統 合の観点から考察を行う。	ティーム・ティー チング方式 集中 週4回4週間にわ たり行う。
	学校カリキュラムの開 発	学校で実施される教育課程の開発の理論と方法を、先行研 究の分析や事例検討に加え、文部科学省研究開発学校等の実 際の学校現場における観察・調査、カリキュラム開発・運用 の手法に関するワークショップ形式の演習等を通して理解す る。 (ティーム・ティーチング方式／全15回) (23 服部 勝憲／5回) 学校現場でのカリキュラム開発・運営に関する豊富な実務 経験に基づき、学校カリキュラムの開発・評価の実際につい て、実務家の観点から考察を行う。 (3 村川 雅弘／15回) 教育課程論に関する研究成果に基づき、学校カリキュラム の開発・評価に関わる理論と方法について、理論と実践の統 合の観点から考察を行う。	ティーム・ティー チング方式
	授業実践の分析と改善	児童・生徒の学習効果（プロダクト）を高める授業過程 （プロセス）を解明するための授業分析法（量的分析及び質 的分析）を習得し、学習効果を高める教師の教授技術を体系 的に整理する。そのため、デモCDや模擬授業、授業計画書 等を対象とした授業実践及び分析演習、模擬授業に対する授 業合評会等を行う。 (ティーム・ティーチング方式／全15回) (4 小野瀬 雅人／15回) 授業心理学の研究成果に基づき、授業分析・授業改善のあ り方とその方法について、理論と実践の統合の観点から考察 を行う。 (21 香西 武／5回) 学校現場での授業実践・授業評価等に関する豊富な実務経 験に基づき、授業実践の分析・改善の実際と課題について、 理論と実践の統合の観点から考察を行う。 (38 梅津 正美／15回) 教科教育学（社会科）に関する研究成果と実際の学校での 教職経験に基づき、授業実践の分析・改善の実際と課題につ いて、理論と実践の統合の観点から考察を行う。	ティーム・ティー チング方式 1クラスを2つに 分割し、平行して 授業を行う。

(出典 鳴門教育大学大学院学校教育研究科高度学校教育実践専攻(教職大学院)
設置計画に係る補正計画書)

貼付資料3-1-4 「授業科目の概要『コース別選択科目』(抜粋)」

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
コ ー ス 別 選 択 科 目	カリキュラムの構成演習	本演習では、授業内容を具現化する教科の指導内容や総合的な学習のカリキュラム構成についての理論と技術を、理論的検討と研究事例や実践事例の分析・検討を通して理解するとともに、実際にカリキュラムの構成演習を行うことにより、カリキュラム構成の技術を修得する。最初の4回は、カリキュラム構成の課題について理論的に学ぶ。次の5回は、教育現場のカリキュラムの研究事例や実践事例の分析・検討を通してカリキュラムの構成の条件と手続きを学ぶ。最後の6回はペアで、カリキュラムを開発し、提案・改善を経ることによって、カリキュラム構成の技術を修得する。	
	教材教具の開発演習	教育内容を具体化し、児童・生徒の学習活動と直接的に関わるものが教材教具である。また教材教具に関わる要素は多様で、しかも深く関わり合っているために、教材教具とは何かをあらためて説明しようとするとは簡単ではない。この授業では教材教具を教材観や歴史的な観点から考察することから始め、教材開発の意義について検討を加える。さらに、発達段階、学習環境等の学習者の実際に即した教科や校種別の教材教具の開発を実際に試み、その有用性を評価する具体的な活動を展開する。 (ティーム・ティーチング方式/全15回) (4 小野瀬 雅人/8回) 教材の心理学の研究成果に基づき、学校現場で求められる教材・教具の開発について、理論と実践の統合の観点から考察を行う。 (15 廣瀬 隆司/9回) 学校現場での教科指導等に関する豊富な実務経験に基づき、教材・教具開発の内容およびその開発方法について、実務家の観点から考察を行う。 (12 西村 公孝/5回) 教科教育学(社会科)に関する研究成果と実際の学校での教職経験に基づき、カリキュラムと教材教具との関係、教材の改善プロセス等について、理論と実践の統合の観点から考察を行う。	ティーム・ティーチング方式
	学習者支援フィールドワーク	本授業では、学校現場で実際に受講者自身による授業実践を行い、それらの授業の中で幼児児童生徒の変容を追跡し、幼児児童生徒の概念獲得、生活知への転換と教師の影響などについて、分析する。具体的には、校種、学年を考慮したグループ編成を行い、各グループによる授業の中で、幼児児童生徒の変容と教師の指導を視点として、授業事前研究、演習授業、事後授業分析を行う。これらの授業を通して、授業に対する分析的視点及びその手法を習得し、幼児児童生徒を変容させる教育技術を習得することを目指す。 (ティーム・ティーチング) (7 川上 綾子/9回) 認知心理学・教育学の研究成果に基づき、学習者の意識・論理と学習指導との関係について、理論と実践の統合の観点から考察を行う。 (21 香西 武/15回) 学校現場での教科指導等に関する豊富な実務経験に基づき、学習者の意識を中核に据えた具体的な指導や支援のあり方について、実務家の観点から考察を行う。	ティーム・ティーチング方式

(出典 鳴門教育大学大学院学校教育研究科高度学校教育実践専攻(教職大学院)設置計画に係る補正計画書)

貼付資料3-1-5 「履修科目登録状況(平成21年度開講分)」

履修科目登録状況(平成21年度開講分)				
科目区分	授業科目名	単位	開設時期	登録人数
共通科目	カリキュラム編成の実際と課題	2	前期	47
	学校カリキュラムの開発	2	前期	39
	授業実践の分析と改善	2	前期	47
	学習指導の構成と展開	2	前期	47
	学習評価の実際と課題	2	前期	47
	生徒指導・教育相談に関するケースカンファレンス	2	前期	39
	子どもの内面理解に関する実践と課題	2	前期	47
	学級経営の実際と課題	2	前期	47
	学校経営の実際と課題	2	前期	39
	教員の在り方に関する実践と課題	2	前期	47
	乳幼児から児童期の発達支援と課題	2	前期	26
	軽度発達障害児への支援と課題	2	前期	28
	道徳教育の実際と課題	2	前期	17
	学校組織の分析と開発	2	後期	12
	家庭・地域との連携構築に関する事例研究	2	後期	12
コース別選択科目	学校危機管理に関する事例研究	2	後期	12
	人材育成と校内研修	2	後期	12
	教育行政と学校教育	2	後期	12
	教育政策の動向と課題	2	後期	12
	学校プロジェクト事例演習(学校・学級経営)	2	後期	12
	実践課題探求(学校・学級経営)	4	通年	14
	エンカウンターグループ体験演習	2	後期	11
	学校カウンセリングの実際と課題	2	後期	11
	外部機関との連携に関する実践と課題	2	後期	11
	学校メンタルヘルス相談の実際と課題	2	後期	11
	生徒指導・教育相談の実際と課題	2	後期	11
	学校臨床実践事例研究	2	後期	11
	学校プロジェクト事例演習(学校臨床実践)	2	後期	11
	実践課題探求(学校臨床実践)	4	通年	11
	学習者理解の実際と課題	2	後期	14
	学習者支援の実際と課題	2	後期	14
	カリキュラムの構成演習	2	後期	14
	教材教具の開発演習	2	後期	14
	学習者支援フィールドワーク	2	後期	14
	教師熟達フィールドワーク	2	後期	14
	学校プロジェクト事例演習(授業実践・カリキュラム開発)	2	後期	14
	実践課題探求(授業実践・カリキュラム開発)	4	通年	8
	授業に関わる実践的研究	2	前期	10
	教科外活動に関わる実践的研究	2	前期	10
	生徒指導・進路指導に関わる実践的研究	2	前期	10
	授業熟達実地演習	2	後期	10
	学級経営実践演習	2	前期	2
	児童理解実地演習	2	後期	10
	学級経営実地演習	2	後期	10
	実践課題探求(教員養成特別)	2	後期	2
実習科目	課題分析実習	4	前期	33
	異校種実習	2	前期	33
	課題解決実習	4	後期	33
	授業熟達実習	2	後期	10
	学級経営基礎実習	2	後期	10
	児童理解実習	2	後期	10
	学級経営実践実習	4	前期	2
	総合インターンシップⅠ	2	後期	2
	総合インターンシップⅡ	5	通年	2

(出典 教務課資料)

観点 主体的な学習を促す取組

(観点に係る状況)

学生の主体的な学習を支援するために、次のような体制と環境を整備している。

主体的な学習を促すため、「学びのポートフォリオ」(別添資料3-2-1)を柱とした学習推進の取組を実施している。「学びのポートフォリオ」に明示された「到達目標：3つの領域、11の観点」に基づき、「自己評価シート」により自己評価を行い、その結果を集計した「到達状況シート」によって自己の達成状況を省察する。さらに、以後の学習の課題と目標について「課題設定シート」を作成することにより、学生は自らの学習課題の設定が可能となり、主体的な学習を行っている。また、学生は日々の学習の成果を「週録」により毎週報告し、指導教員が確認・指導している。このように、学生が主体的に学ぶことを継続的に促す学習支援の体制を整備している。

「授業概要（シラバス）」（貼付資料3-2-2）には、各授業担当教員が設定したオフィスアワーを明示・周知し、授業に関する質問・相談への対応等、きめ細やかな指導を行っている。

なお、学生は評定と点数の相対的位置をウェブページにおいて得点分布によって確認し、学びの成果を自己点検できるようにしている（貼付資料3-2-3）。

一方、授業や学生の自主学習・情報交換に有効に活用できる学習環境として、院生室（6室）、資料分析実習室（3室）、ゼミナール室（6室）、資料室（1室）及び資料編集室（1室）を設置している。さらに、ネットワーク及び情報機器等が整備され、学生が各種の授業準備や、模擬授業、実践映像の分析を行うなど主体的に活用している。

貼付資料3-2-2 「授業概要（シラバス）」

【共通科目・学習評価の実践と課題】

【授業科目名】	学習評価の実践と課題
【英文名】	Facts and Problems of Educational Evaluation
【担当教員・所属・研究室番号】	川上 綾子・授業実践・カリキュラム開発・A414 香西 武・授業実践・カリキュラム開発・C606 西村 公季・授業実践・カリキュラム開発・A207
【標準履修年次】	1年次
【授業形態】	講義・演習
【開講時期】	前期・金曜・1限
【単位数】	2単位
【キーワード】	学習評価、指導展開、学習展開、妥当性・信頼性、テスト理論
【連絡先・オフィスアワー】	kawakami@naruto-u.ac.jp、授業日の研究室在室時はいつでも対応する。

【授業の目的及び趣旨】

教育評価について視野を広げるとともに、最近における学習評価のパラダイム転換について理解を深めた上で、学習評価の進歩、改善への実証的研究について、理論的、技術的な力量を修得する。

【授業計画】

週	授 業 の 内 容
1	教育評価について歴史的に概観し、その現実と課題を明確にする（Ⅰ）。 （講義：川上、香西、西村） 〔教育評価を歴史的にとらえ直し、その現実を明らかにすることから課題を焦点化する。〕
2	教育評価について歴史的に概観し、その現実と課題を明確にする（Ⅱ）。（講義：川上） 〔現在の教育評価の課題について、その改善策について考察する。〕
3	教育評価の新しいパラダイムの方向を明確にし、現在の課題について検討する。 （講義：川上） 〔教育評価の現在、及びこれからの求めるべき方向について考察し、学校現場にとって望ましい教育評価のあり方について提案する。〕
4	学習評価と指導展開についての概念と、それらの関係を明らかにするなかで、それらを一体のものとしてとらえることの重要性を明らかにする。（講義・演習：川上、西村） 〔各教科等を絞り、学習評価と指導展開についての関係を分析することを通して、学習評価の重要性を明らかにする。〕
5	学習評価と学習展開についての概念と、それらの関係を明らかにするなかで、それらの関連をとらえることの重要性を明らかにする。（講義・演習：川上、西村） 〔各教科等を絞り、学習評価と学習展開について分析することを通して、学習評価の重要性を明らかにする。〕
6	学習評価の実践の場を明らかにし、それを妥当性と信頼性の観点からとらえることの意義を検討する。（講義：川上） 〔学習評価における課題でもある妥当性と信頼性の観点から、学習評価の改善策を講ずる。〕
7	具体的な学習指導場面をもとに、学習評価方法の改善・進歩の必要性について確認する（Ⅰ）。 （演習：香西、西村） 〔各教科等を絞り、具体的な学習場面における学習評価について分析することを通して、その改善策を明らかにする。〕
8	具体的な学習指導場面をもとに、学習評価方法の改善・進歩の必要性について確認する（Ⅱ）。 （演習：香西、西村） 〔道徳・特別活動・総合的な学習等に絞り、具体的な学習場面における学習評価について分析することを通して、その改善策を明らかにする。〕

8	具体的な学習指導場面をもとに、学習評価方法の改善・進歩の必要性について確認する（Ⅱ）。 （演習：香西、西村） 〔道徳・特別活動・総合的な学習等に絞り、具体的な学習場面における学習評価について分析することを通して、その改善策を明らかにする。〕
9	テスト理論とその処理方法について検討する（Ⅰ）。（講義：川上） 〔小学校・各教科等の実際のテスト場面を再現し、その課題を明確にするとともに、その改善策について考察する。〕
10	テスト理論とその処理方法について検討するとともに、学校現場でのテストとその処理方法と比較検討し、その課題を明確にする（Ⅱ）。（講義：川上） 〔中学校・各教科等の実際のテスト場面を再現し、その課題を明確にするとともに、その改善策について考察する。〕
11	学習評価理論と評価の実践との関連についての検討を通してその課題と改善策について検討する（Ⅰ）。（演習：川上、香西、西村） 〔校種別、各教科等別のグループ活動によって、学習評価の課題と改善策について調査し報告する。〕
12	学習評価理論と評価の実践との関連についての検討を通してその課題と改善策について検討する（Ⅱ）。（演習：川上、香西、西村） 〔校種別、各教科等別のグループ活動によって、学習評価の課題と改善策について調査し報告する。〕
13	課題演習（Ⅰ）（演習：川上、西村）〔具体的な評価場面に焦点を当てた模擬授業等を通して、評価・改善した学習評価についてプレゼンテーションする。〕
14	課題演習（Ⅱ）（演習：川上、西村） 〔具体的な評価場面に焦点を当てた模擬授業等を通して、評価・改善した学習評価についてプレゼンテーションする。〕
15	望ましい学習評価の考え方と方法についてまとめをする。（講義：川上、西村） 〔これまでの学習・研究の成果を明らかにし、実践研究への意欲づけをする。〕

【履修上の注意事項】

授業では、受講者個人及びグループによる調査、報告、討論等の形態を積極的に活用する。また学習評価の理論と実践について、具体的な学習指導場面を通して明確にすることを重視しているため、明確な課題意識のもと積極的に主体的な学習・研究活動を期待する。

【成績評価方法】

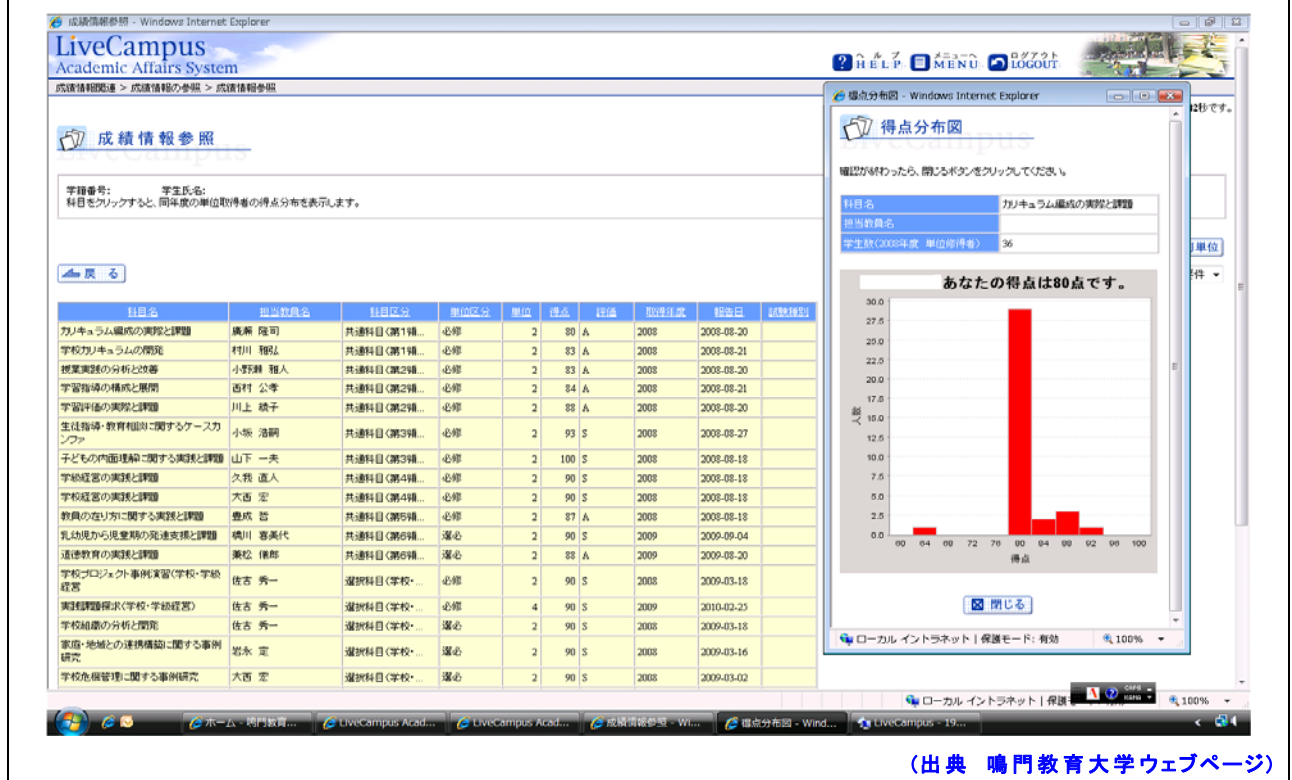
出席、プレゼンテーション、レポート（学習評価事例）等によって総合的に評価する。また評価項目とその重みづけについては、最初の授業時に説明する。

【テキスト・参考文献】

授業開始時にテキスト、参考図書等を紹介する。またプリント等資料は適宜配布する。

（出典 平成21年度授業概要）

貼付資料3-2-3 「『在学生の方へ』ライブ・キャンパス(在学生専用)」



(2) 分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

授業形態の組合せと学習指導法の工夫については、理論と実践の融合を図る観点から、ほぼ全ての科目で事例研究、ワークショップ、討論などの双方向型の授業を実施するなど、創意工夫を凝らした授業を展開している。また、指導法においても、「共通科目」と「コース別選択科目」では、ほぼ全ての授業科目において、研究者教員と実務家教員がティーム・ティーチングを行う体制をとっており、理論を踏まえながら実践的な力量形成を意識した授業を組織的に実施している。

「実習科目」では、院生ごとに実務家教員と研究者教員が協働して指導する体制を構築し、実習校と連携しながら、計画的な実習指導を行っている。

また、本専攻独自の「学びのポートフォリオ」を活用し、学びの到達目標を明示するとともに、学生が到達目標に対して自己評価を行い、さらに、自らの学習の過程と成果を省察するなど、個々の学生が目標を持って主体的に学習に取り組む体制を確立している。

以上のことから、「期待される水準を上回る」と判断できる。

分析項目Ⅳ 学業の成果

(1) 観点ごとの分析

観点 学生が身に付けた学力や資質・能力

(観点に係る状況)

教育の成果は、学生の単位修得状況、教育職員免許状一括申請件数、「鳴門教育大学の教育等に関するアンケート」の結果等から判断できる。

単位修得状況については、平成 21 年度の前期・後期とも、開講した全ての共通科目、コース別選択科目及び実習科目において単位修得率が 100%である(貼付資料4-1-1)。

教育職員免許状については、申請人数 33 人で延べ 75 件取得している(貼付資料4-1-2)。

修了の認定基準及びその認定方法については、「鳴門教育大学学位規程」(貼付資料4-1-3)において、既設の修士課程と明確に分けて示しており、その内容や方法も「教職修士(専門職)」の学位認定に適切な設定を行っている。平成 21 年度の修了判定にあたっては、学修評価判定委員会が組織され、2 年次生による「最終成果報告書」とそのプレゼンテーション等をもとに、現職教員学生、学部卒学生に応じた領域別評価と総合評価を行い、可否を判定した。領域別評価の判定基準は、「顕著な学習成果が認められる場合：A = 2」, 「大学院における学修の一定の成果が認められる場合：B = 1」, 「成果が認められない場合：C = 0」と定め、標準値を B = 1 とした。領域別評価については、学生の所属コース別の集計結果のとおり、いずれのコースについても、全ての領域で平均値が標準値を上回っている(貼付資料4-1-4)。

また、平成 22 年 3 月修了生に実施した「鳴門教育大学の教育等に関するアンケート」の「具体的な成果(一般的資質)」の項目で、「幅広く豊かな教養」が「十分身に付いた」、「どちらかといえば身に付いた」の肯定的回答が 72%、「具体的な成果(教員資質)」の項目では「専門領域における知識」が「十分身に付いた」、「どちらかといえば身に付いた」の肯定的回答が 70%であり、「専門性と実践力を備えた力量のある教員を養成する」という本学の目的を達成している(貼付資料4-1-5)。

さらに、平成 21 年 9 月に実施した四国各県教育委員会及び鳴門市教育委員会へのアンケート結果では、本学での「教育実践指導力の育成」の教育効果について、「効果があると思う」の肯定的回答が 100% (5 件中 5 件)(貼付資料4-1-6)、現職教員学生の勤務校校長 33 人を対象としたアンケート結果においては、「教育実践指導力」について「効果がある」と、33 人全ての校長が回答するなど(貼付資料2-2-3 : 1-12 頁参照)、学生は教育委員会や学校など関係者が期待する学力や資質・能力を身に付けている。

貼付資料4-1-1 「単位修得状況」

単位修得状況

平成21年度開講分					(%)
科目区分	合格				不合格
	S	A	B	C	D
共通科目	66.9	30.2	2.7	0.2	0
コース別選択科目	80.6	18.8	0.6	0	0
実習科目	80.7	19.3	0	0	0

(出典 教務課資料)

貼付資料4-1-2 「教育職員免許状一括申請一覧表」

平成21年度教育職員免許状一括申請件数一覧表

	申請人数	免許教科	左の免許教科に係る免許状種別申請件数															計		
			幼稚園			小学校			中学校			高等学校			養護		特別支援学校			
			専修	1種	2種	専修	1種	2種	専修	1種	2種	専修	1種	2種	専修	1種	2種		専修	1種
高度学校 教育実践 専攻	33	国語	2			20			3			3								22
		社会							5											6
		地理歴史										5								5
		公民										4								5
		数学							3			3								4
		理科							5			4								6
		美術										4								9
		保健体育							1			1								2
		英語							2			2								4
		工業							3			3								6
		農										1								1
		書道										1								1
		家庭							2			2								4
計	33	2			20			24			29								75	

(出典 教務課資料)

貼付資料4-1-3 「鳴門教育大学学位規程(抜粋)」

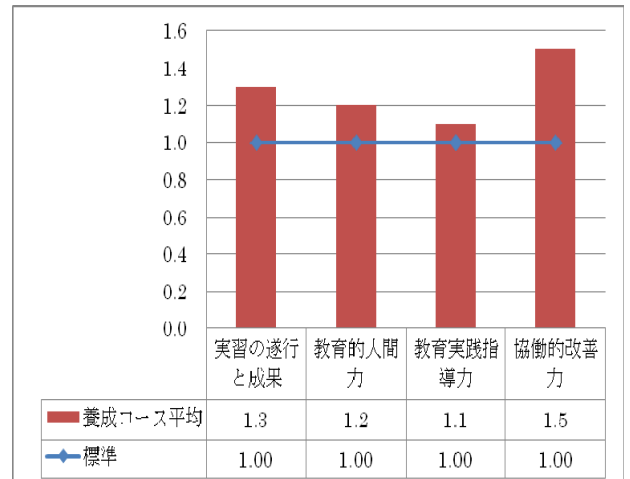
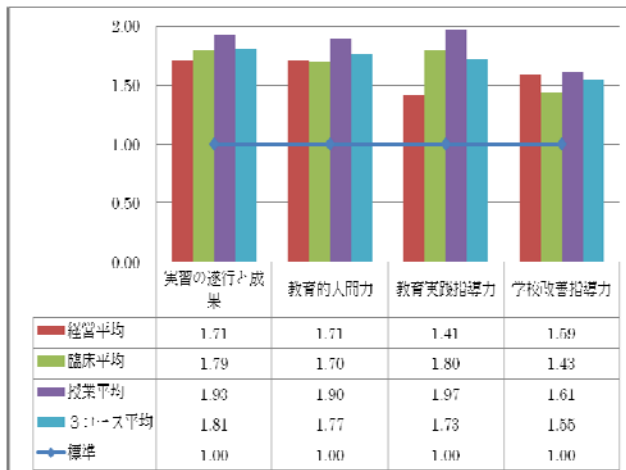
第4章 教職修士における学修成果の総括的評価等

(教職修士の最終成果報告書の提出)

第14 教職修士における学修成果の総括的評価を受けようとするときは、研究科長に最終成果報告書を提出しなければならない。

(出典 国立大学鳴門教育大学規則集)

貼付資料4-1-4 「最終学修成果に係る領域別評価」

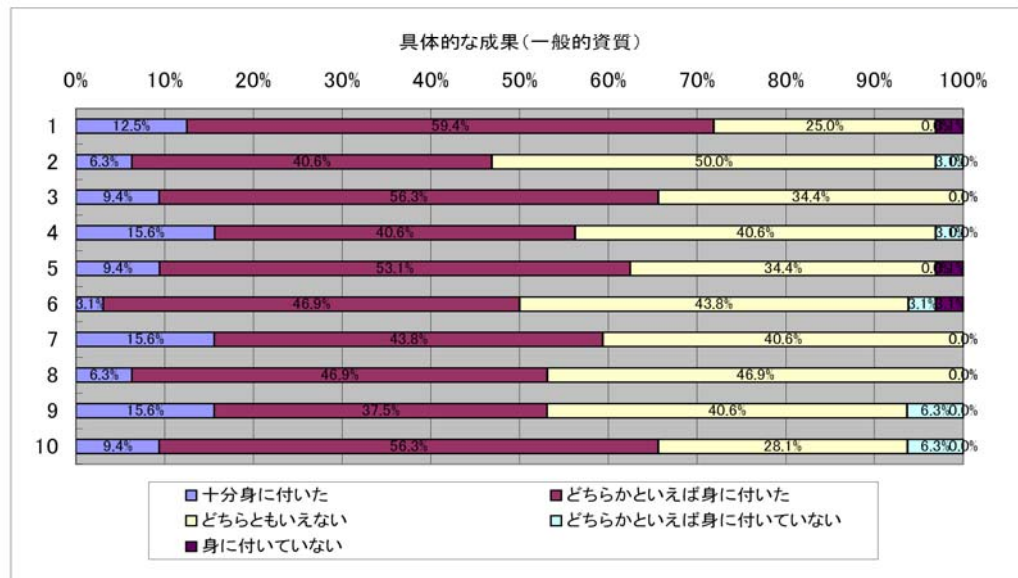


(出典 教務課資料)

貼付資料4-1-5 「鳴門教育大学の教育等に関するアンケート(平成 22 年3月修了者)」
『具体的な成果(一般的資質)』

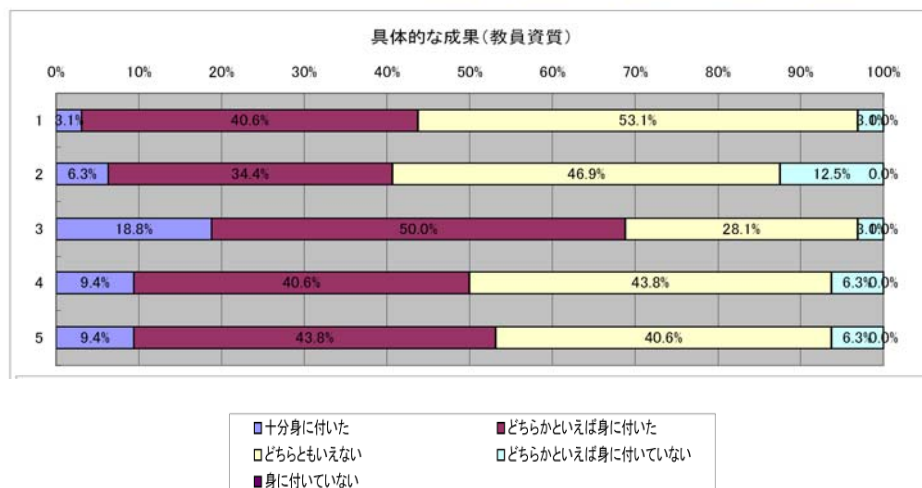
Q7-5 具体的な成果として

一般的資質	十分身に付いた		どちらかといえば身に付いた		どちらともいえない		どちらかといえば身に付いていない		身に付いていない		有効回答 件数
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	
1 幅広く豊かな教養	4	12.5%	19	59.4%	8	25.0%	0	0.0%	1	3.1%	32
2 強い責任感	2	6.3%	13	40.6%	16	50.0%	1	3.1%	0	0.0%	32
3 コミュニケーション能力・折衝能力	3	9.4%	18	56.3%	11	34.4%	0	0.0%	0	0.0%	32
4 他者に対する人間的愛情	5	15.6%	13	40.6%	13	40.6%	1	3.1%	0	0.0%	32
5 創造性	3	9.4%	17	53.1%	11	34.4%	0	0.0%	1	3.1%	32
6 精神的強さ	1	3.1%	15	46.9%	14	43.8%	1	3.1%	1	3.1%	32
7 協調性	5	15.6%	14	43.8%	13	40.6%	0	0.0%	0	0.0%	32
8 社会規範・マナー	2	6.3%	15	46.9%	15	46.9%	0	0.0%	0	0.0%	32
9 リーダーシップ・実行力	5	15.6%	12	37.5%	13	40.6%	2	6.3%	0	0.0%	32
10 情報活用能力	3	9.4%	18	56.3%	9	28.1%	2	6.3%	0	0.0%	32



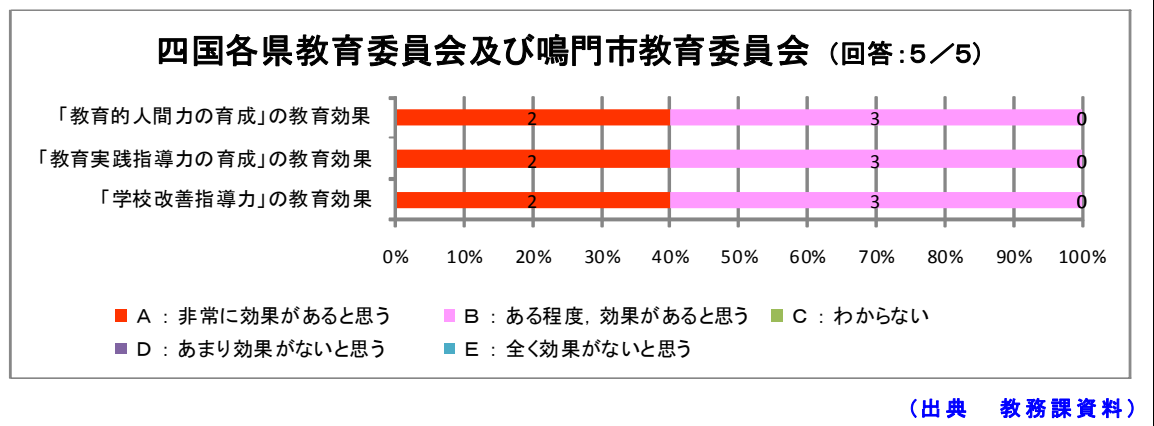
『具体的な成果(教員資質)』

教員資質	十分身に付いた		どちらかといえば身に付いた		どちらともいえない		どちらかといえば身に付いていない		身に付いていない		有効回答 件数
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	
1 授業方法能力	1	3.1%	13	40.6%	17	53.1%	1	3.1%	0	0.0%	32
2 教材研究開発能力	2	6.3%	11	34.4%	15	46.9%	4	12.5%	0	0.0%	32
3 専門領域における知識	6	18.8%	16	50.0%	9	28.1%	1	3.1%	0	0.0%	32
4 学級経営能力	3	9.4%	13	40.6%	14	43.8%	2	6.3%	0	0.0%	32
5 生徒指導能力	3	9.4%	14	43.8%	13	40.6%	2	6.3%	0	0.0%	32



(出典 鳴門教育大学の教育等に関するアンケート集計(平成 22 年3月修了者))

貼付資料4-1-6 「四国各県教育委員会及び鳴門市教育委員会へのアンケート結果」



観点 学業の成果に関する学生の評価

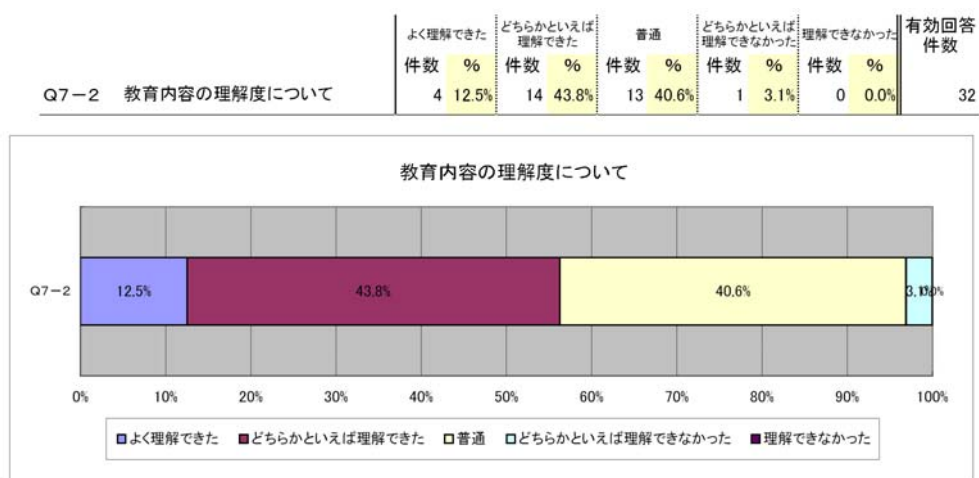
（観点に係る状況）

平成 22 年 3 月修了生に実施した「鳴門教育大学の教育等に関するアンケート」では、「本学で学んだことの成果について」に対する設問「教育内容の理解度」について、「よく理解できた」「どちらかといえば理解できた」の肯定的意見が 56.3%である一方、「どちらかといえば理解できなかった」「理解できなかった」という否定的意見は 3.1%にとどまっている（貼付資料4-2-1）。このことから、学生が教育内容をほぼ理解していると判断できる。

また、全ての科目で実施している「大学院生による授業評価アンケート」の集計・分析結果では、「授業概要」、「教員の授業の進め方」等多くの項目が 5 段階評価の 4 以上であり、「この授業は、自分にとって満足できるものであった」という満足度を問う設問の平均回答も 3.8 以上である（別添資料4-2-2）。

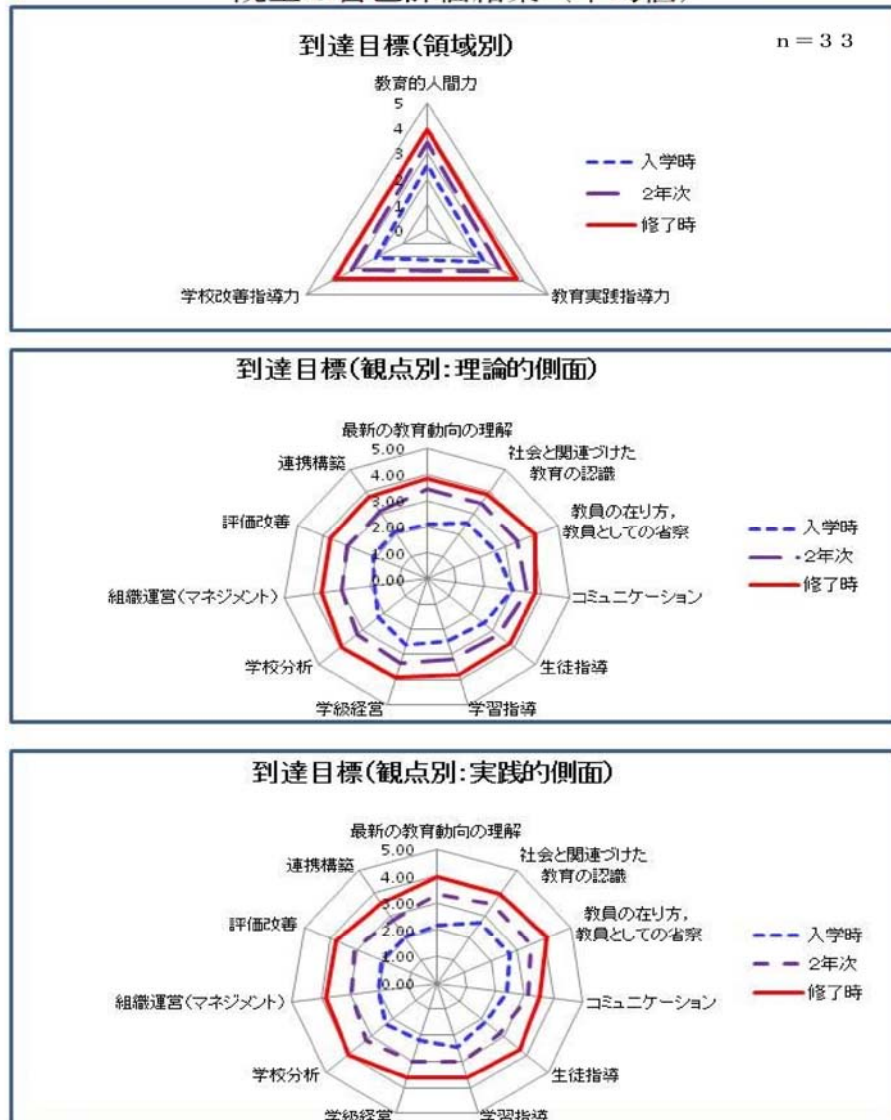
さらに、「学びのポートフォリオ」（別添資料2-1-4）において設定した「到達目標」に関する「到達状況シート」を、入学時、2 年次、修了時に実施した結果の推移から、3 領域と 11 観点のいずれにおいても、年次進行により学生の自己評価は上昇しており（貼付資料4-2-3）、学業の成果に関する学生の評価は高い。

貼付資料4-2-1 「鳴門教育大学の教育等に関するアンケート（平成 22 年 3 月修了者）」



（出典 鳴門教育大学の教育等に関するアンケート集計（平成 22 年 3 月修了者））

貼付資料4-2-3「教職大学院(H20入学現職教員)到達状況推移」


教職大学院生（H20入学現職教員）到達状況推移
院生の自己評価結果（平均値）


(出典 教務課資料)

(2)分析項目の水準及びその判断理由

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

学業の成果として、平成 21 年度に開講した全ての共通科目、コース別選択科目及び実習科目において単位修得率が 100%であること、さらに、教育職員免許状の申請人数 33 人、申請延べ件数及び取得延べ件数はともに 75 件である。また、学修成果の評価について、到達目標別の基準を設定し、その評価は設定された到達目標のいずれの領域においても高い数値を示している。

学業の成果に関する学生の評価については、「鳴門教育大学の教育等に関するアンケート」において、特に到達目標に関して、学生の就学後の自己評価が時間経過とともに肯定評価が増加している。

さらに、現職教員学生の勤務校校長 33 人を対象としたアンケート結果においても、33

人の校長全てが「教育実践指導力」について「効果がある」と回答し、課題解決実習（10～11月：勤務校実習）の前後の比較において、肯定評価の増加傾向が見られるなど、関係者が期待する指導的役割を担うための学力や資質・能力を身に付けている。これらのことから、教育の成果はあがっているといえる。

以上のことから、「期待される水準を上回る」と判断できる。

分析項目Ⅴ 進路・就職の状況

（１）観点ごとの分析

観点 修了後の進路の状況

（観点に係る状況）

平成22年3月に第1期の学生が修了し、学部卒学生を対象とした「教員養成特別コース」の修了生2人が教職（神奈川県，徳島県）に就いた。

また，現職教員対象の「学校・学級経営コース」，「学校臨床実践コース」及び「授業実践・カリキュラム開発コース」の3コースから33人が修了し，県教育委員会指導主事等として2人，県教育センターへ1人，教員として30人が学校現場に復帰した。

学校現場に復帰した修了生には，生徒指導・教育相談に関する専門的知識を持つリーダー教員として「学校巡回指導教員」となった者が1人，「主幹教諭」に抜擢された者が1人いることから，教育委員会等の要請に応え，学校や地域で指導力を発揮できる教員の養成が行われているといえる。

質の向上度の判断

①事例1『学びのポートフォリオ』による学修の評価と体系化（分析項目） （質の向上があったと判断する取組）

平成21年度より、学生が学修のプロセスを省察できるように「学びのポートフォリオ」※1を作成し、学修の内容と目的を体系化して捉えられるように設定された「到達目標」※2に対して、現職教員学生、学部卒学生それぞれのキャリアに合わせた「到達状況シート」※3、「課題設定シート」※4の提出を求めている。従来の「週録」※5もこの「学びのポートフォリオ」の一環として位置づけ、短期的な学修プロセスの省察の手続きとして活用している。これにより、学生の学修の成果や課題をより網羅的かつ体系的に把握でき、学生が目標をもって主体的な学修に取り組む体制をとってきた。

その結果は「到達状況推移」※6にみられるように、年次進行とともに体系的な学修の成果が向上していることで明確に示されており、質の向上があったと判断できる。

※1「学びのポートフォリオ」～ ※5「週録」（別添資料3-2-1参照）

※6「到達状況推移」（貼付資料4-2-3：1-25頁参照）